

第一章

四〇周年によせて

●四〇周年によせて

知・徳・体のバランス

元中四国学生剣道連盟会長

石田 成夫

光陰矢の如しと申しますが、月日の経つのは早いもので、中四国学生剣道連盟が結成されてから、早、四〇年の歳月が経過しました。そこで、これを契機として、関係各位の発意と協力により、記念史の編纂が企画されることとなったのは、真に意義深く、慶祝にたえません。

実は、昨年末、このことに関連して原稿の依頼がありました。私が中四国学生剣道連盟に関与していたのは、昭和四三年から昭和四九年頃まで、即ち、もう二〇年も以前のことなので、その当時の思い出や資料など、すっかり整理され残っておりません。したがって、記念史の一頁を飾るにふさわしい記事も書けないので、今回は辞退させていただきたいと思っていました。再度、山神先生から



督促のお電話をいただいたので、本連盟結成四〇周年を迎えてというメッセージの形で、所感の一端を執筆させていただくこととしました。

顧みますに、私が会長に就任していた当時は、わが国の大学は、丁度、中国の文化大革命と時を同じくして、学園紛争が全国に蔓延し、学内には、暗く、重苦しい雰囲気が漂っていました。

そこで、大学生活を明るく活力あるものとするためには、スポーツを中心とするクラブ活動に力を注ぐことが、何よりも大切だと考えられるようになってきました。

特に、剣道は、古くから我が国に伝わる武術の一つで、剣道というスポーツを通じて心身を鍛え、そして、日本の素晴らしい歴史と輝かしい伝統にふれることは極めて重要なことで、ことに剣道は、「礼に始まって礼に終わる」と言われるくらい、礼節を貴び、立派な徳性を身につけることに力点がおかれています。

この点「大学は明徳を明らかにするに在り」という中国の朱子の名言に示されている如く、将に大学教育の最終且つ最大の課題は、立派な人間、すなわち、人格の形成に努めることです。

したがって、最高学府の学生として、学問研究のかたわら剣道を通じて強い体力と精神力を養い、知・徳・体のバランスのとれた人間形成に励み、そして、やがて来たるべき二一世紀を展望し、国際化・情報化・高度技術革新の時代に活躍できる、前途有為な人材として人格の形成に努められることは非常に貴く大切なことだと思います。

この際、そうした意味からも、中四国学生剣道連盟がその中心となって、時代に即した、剣道の健全なる普及と振興に努められ、そして地域社会や学生諸君からも期待され、敬愛される存在となるよう、中四国学生剣道連盟の結成四〇周年に当たり、今後、益々のご発展と、役員関係者各位のご健勝を祈って、お祝いのメッセージといたします。

●四〇周年によせて

連盟旗

「剣気」のもとに

中四国学生剣道連盟常任顧問

植田 一



さきの全日本学生剣道連盟四〇周年につづき、我が中四国学生剣道連盟でも今年四〇周年を迎えることになり、その記念誌をこのたび編纂することになったことはまことに慶びに堪えません。

私は戦後思い切って学校教師を辞め、新しい仕事に就いたので剣道の稽古はしばらく忘れることにして、あまり学生諸君の面倒

を見ることができませんでしたが、縁あって昭和三二年、母校香川大学剣道部の師範を委嘱されて以来、大森先生の要請もあり、中四国学生大会にも顔を出すようになりました。

何でも最初の頃はわずか男子一〇校位で、極めて淋しく微々たるものでありましたが、四〇年を迎えた現在男女共に四三大学の加盟を数えることになり、実に感無量のものでございます。

私の知り得た卓越せる隅田会長に引続いての大森会長、さらには現腰山会長の熱意ある指導により諸先輩方が協力をされ、今日の隆盛を作り上げられましたこと、心から感謝いたしておる次第です。

昨年は連盟旗を作ることと標語とその揮毫を依頼され、熟慮の結果「剣気」と名付けて書かせて貰い、次のとおり附記を贈ってご披露させていただきました。

「剣気」とは、剣により気を知り、気で鍛えることであつて、人間は宇宙大自然によつて生かされ、また生きてきている。その天理遵法の真理に従つて肉体、精神を鍛えんと最高の力が発揮できるものである。

「気」という字のついた言葉のどれほど多いことか、ちよつと数えても百をはるかに超えている。いかに人生とかわり合いが深いかがよくわかる。

中四国を愛し、中四国に馴染みの深かった私の亡父（剣道範士九段）も大切にしていたこの言葉「剣気」を中四国学生剣士諸君におくり、諸君がこれからの生涯に向けて気力一ぱい飛翔活躍するための剣道修練にあたつての心の旗印として欲しい。

この「剣気」旗のもと、正しい剣道、美しい剣道、格調高い剣道を探究され、中四国学生剣道連盟関係の諸兄弟が、今後ますます発展されますよう切に祈つて止みません。

●四〇周年によせて

大学剣道の使命

中四国学生剣道連盟副会長

杉本八郎



中四国学生剣道連盟の創立四〇周年を迎え、関係者の一人として祝意を表すると共に、加盟校、僅か十数校で発足したと聞くこの連盟が、現在では四三校にも及ぶ多数の加盟校を擁するまでに大きく成長したことは、誠によろこばしい限りでございます。

これは、ひとえに歴代会長を始めとして、先輩の諸先生、とりわ

け多くのOBの方々の長年にわたる献身的なご尽力とご苦勞の賜物であることに感謝し、忘れてはならないことだと思います。

さて、戦前、戦後を通して、今日の日本の剣道界の現状を見る時、これを支えているのは警察剣道と各地域社会で実施活動している一般社会人剣道の二本柱に分けられます。(勿論、これは私の個人的な私見であり、異論の方もありますがその点はご容赦ください。)

この一般社会人剣道の中核をなしているのが大学剣道部出身のOBたちであります。故にここでは警察剣道に対して、一般社会人剣道を便宜上、大学剣道(現役学生を含めて)と呼称させていただきます。

この警察剣道と大学剣道の正しい進歩こそが、日本剣道の指針となり、その発展に大きく寄与し、貢献するものだと思います。この日本剣道界を背負って立つ、二本柱の一つである大学剣道の次代の後継者が現役学生のみなさんであり、その責任は誠に大きいものであります。

しかる上で、私が憂慮している一つは、最近の大学生が、卒業して就職すると共に、剣道から遠ざかり、止めて行く人が案外多いことです。これから剣道の本当の奥深い良さやおもしろみが、少しずつ、わかってくる時期に中断してしまうことは、遺憾の極みです。剣道は老若男女を問わず、対等にできる、格技では唯一のものであり、又健康維持のためにも、生涯スポーツとして最適のものであります。このように多くの利点と特色をもつ、わが国古来の文化遺産である剣道を、先進の教えを守り、その遺志を正しく後世に伝えて行くことこそ、大学剣道の使命ではないかと思えます。

剣道は死ぬまでが修業だと言われています。初心忘れず、途中挫折することなく、生涯剣道を目標に、その輪を広げて行くことが、自己のためにもなり、剣道界の発展にも寄与する所以であると思えます。

●四〇周年によせて

(故)大森先生と私

中四国学生剣道連盟副会長

五月女武治



国民体育大会

昭和三十一年、第一回国民体育大会が赤穂市赤穂高等学校体育館で開催されました。その時の監督は大森先生でした。私は次峰（二〇才台）として出場しました。まだ剣道競技は公開種目で、しない競技が正式種目でありました。

広島県内の予選で優勝したものの、旧制中学校時代（昭和一五年より昭和二〇年）の経験の後、約一〇年間のブランクがあり、また剣道三段の者がはたしてまともに試合ができるのか心配をしていました。その時、大森先生は勝負を気にせず気楽に試合を、との指導をされたと記憶しています。心配している私に対する最高の励ましであったと思います。

昭和三十九年、第一九回国民体育大会が新潟県村上市村上高等学校で開催され、大森先生は大将で、私は中堅（三〇才台）で出場しました。その時の先生の立派な試合運びは、今でも強く脳裡に残っています。

その後は、鹿児島県、茨城県、青森県、長野県、宮崎県、栃木県、滋賀県、島根県、群馬県、最後の出場の昭和六三年第四三回大会まで、大森先生は本部役員として参加されていました。何時も試合前に私達の選手控室にこられ平常心で試合をと、激励されておりました。私の国民体育大会出場の違いとしては、何時も大森先生のご指導がありました。

中四国学生剣道連盟

私が連盟に関係するようになったのは、大森先生のお誘いでした。昭和三五年以降の中四国大会の審判員として委嘱されたと思います。その当時の広島の場合は広島市内の高等学校の体育館を使用していました。今考えてみると、審判にはとまどう事もありましたが諸先輩のご指導で正確な審判ができました。

その後、全日本学生剣道連盟主催の東京、大阪、名古屋で開催された大会の審判に委嘱され、何時も試合者の立場に立って、有効打突を見のがすことのないよう努力しました。審判法の向上も大森先生なくしては考えられない思い出となっております。

また、大森先生の推挙で中四国学生剣道連盟選出の評議員となり、全日本学生剣道連盟の育成・発展に参加しました。そして、全日本学生剣道連盟四〇周年記念誌に参画できたことに感謝をしております。

大森玄伯先生のご冥福をお祈りします。

さて、中四国学生剣道連盟四〇周年を迎え記念誌を発刊することは、編集委員の皆様から敬意を表します。また、当連盟の創設以来の植田一先生、(故)大森玄伯先生をはじめ諸先輩のご尽力に對し、心より感謝申し上げます。

●四〇周年によせて

民族の美意識

中国国学生剣道連盟副会長

高澤貞三

このたび、中国国学生剣道連盟から、学生剣道の四〇年史を発刊することになり、大変感慨深いものがあるとともに、喜ばしいことだと思います。

私は昭和二八年、一橋大学の戦後復活剣道部の責任者でありました。今ではこの復活剣道部なるものについても一定の説明を要しますが、剣道の歴史が政治のそれと関係が深かったということだけを述べておきましょう。大学四年生であったこの時に、当時の大先輩から次のような重大な質問を受けました。「貴君が剣道を復活させようとする真意は如何。剣道を復活させるのか、それとも戦後のスポーツとして剣道をはじめようとするのか。」という問題提起でもありました。当時の大先輩の方々の顔が今でも想起されます。私の答えは、その時に、スポーツとしての剣道ですというものでありました。きわめて当然の解答の如く答えたものでした。かくも簡単



に答えをだしたものの、どうもそれ以後四〇年になります今日まで、この問題はまさに問題そのものでありつづけてきました。

大学院を卒業し、現松山大学に赴任したのは昭和三六年でした。昭和四〇年からこの松山大学の剣道部長をひきついでいます。この間ずっと剣道にかかわって来ているということになります。毎年毎年の剣道部の部づくりに、先述の問題が関係してきます。学生も年々変わります。剣道の環境にも変化があります。個別の大学ごとの環境にも変容があります。そのなかで四〇年前の先述の問題だけ何らの変わりなく益々重みをもって私の心のうちに沈んでいきます。

十数年前から、法定という形にいくらかの関心をもつようになりました。私が大学生の頃には、一橋に法定が伝達せられていることは知っていながら、ほとんど関心を寄せていませんでした。それが徐々にこの剣の形に興味を感じるようになったのであります。

形に関心をもつことは、剣の美に関心をもつことになります。日本の美とも関係の深い形の美であります。しかもそれはもとをただせば民族の美意識でしょう。こうなりますと先の二者択一の問題提起は、当然一つの統合的な問題になります。すなわち剣道かスポーツ剣道かという問いは意味をもたなくなるということです。

今では、剣道は剣道でもあり、スポーツ剣道でもあると確信しています。民族の伝統としての剣道の歴史性をもっと深く認識したいと思っています。私は剣道の専門家ではありませんので、技術の向上についてはさまざまな助言はできません。でも大学剣道部のあり方には私なりの見解があります。剣道部の部員として、個人としてどのように剣道に接するべきかについて、次のように考えています。それはまず、剣道を好きになり、そしてつづいて自分の剣道を創造してゆくことです。その前には剣道を自分なりに理解しなければなりません。これが私の理解的な剣道、創造的な剣道を提唱する由縁であります。人権思想に埋没せられることのない人格や個人の修養を基底にした剣道をたがいに創造したいと思っています。

●四〇周年によせて

日本剣道形的重要性

中四国学生剣道連盟顧問

石田敏男



すばらしい歴史と伝統のある中四国学生剣道連盟に顧問として名を連ねさせていただいていることを感謝いたしております。

最近「日本剣道形」の重要性が指摘せられ、八段審査にも必須科目として適用されるようになったことは意義のあることであり喜ばしいことです。

学生時代に寒中でも稽古衣袴で呼吸を凝らし、体が暖まるほど修練に励んだことを思い出して、我が意を得たりと思っております。

又解説の平易化や字句の表現まで現代風に研究改善の気運にあることも、文化的遺産としての剣道の発展と実力の養成のために時宜を得たものといわなければなりません。

学生諸氏の毎日の真剣な稽古への精進と、各種大会の隆昌をみる

につけても感動なきを得ません。心より敬意を表する次第であります。折角の稽古の実力をさらに向上し、剣道を通じての人間形成を一層成果あらしめるものとして、毎週一回一時間でもよい「剣道形」の研究に打ち込むことは極めて意義のあることだと私は思います。

あるいはすでに実践なさっておられる学校もあるかもしれませんが、私の体験から申ししても竹刀をもつての稽古に加えて形の稽古を探究することが剣の理法の真の修練になり又効果を上げることとなり、学生時代のみでなく大学を卒業して社会に出てからも、生涯剣道に道を開くことになると信じます。形の修練は技術的理合を身につけると共に、呼吸・精神的自得を重ね、人生への深みと高みに自ら悟入する糸口を見せるのではないのでしょうか。

段位年令を越えて学生が全日本選手権への出場の道も開かれる新しい時代になり、学生大会からの飛躍を期待できる日も遠くないような気がいたします。その為にも今の学生剣道の特性に加えて、地道に剣道形の研究修練を行ない、実力を蓄えることが真の剣道の強さ、風格、格調の高さといったことのみならず人生への悟入に近づく得る道があるように思われます。

日々ご指導に当たられる先輩、先生の方々に敬意を表すると共に、学生諸氏の御健闘を祈り、中四国学生剣道連盟の益々の発展を祈念いたします。

●四〇周年によせて

学生剣道の役割

中四国学生剣道連盟顧問

石原忠美



中四国学生剣道連盟四〇周年おめでとうございます。

ご承知のように、第二次世界大戦で日本が敗れた結果、連合軍の占領政策によって、我が国の剣道界は潰滅的な打撃を受けました。

学生剣道も完全に追放され組織的活動は全く不可能となり、これまで、全盛を誇ってきた剣道も惨憺たる状態に陥ち入り消滅の危機にさらされたのです。

このような状況下にあった当時、剣道の将来はどうなることかと心配されたのですが、講話条約発効後は、同志諸賢の献身的な努力

によって、いち早く学生剣道が生氣を取り戻し、予期以上の早さで復活をとげることができました。各県の大学数も漸次増加し、紆余曲折はありましたが次第に質量ともに充実されてきたことは誠に慶賀に堪えません。

こうした経過の中で、中四国学生剣道連盟の初代会長・津田誠次先生、二代・中塚正行先生、三代・石田成夫先生、四代・隅田哲司先生、五代・大森玄伯先生、さらに現代の腰山静雄先生へと発展的に伝承されていることは剣道界にとって心強いことです。

私は常々、学生剣道の消長が日本民族伝統の剣道の盛衰に繋がると考えております。

このような意味においてこの度、「中四国学生剣道連盟四〇年誌」発刊に大きな意義を感じます。

全日本剣道連盟は全日本選手権の出場資格を、平成七年から二〇才以上としました。

このことは、学生剣道を大いに活性化することになるでしょう。四〇周年という大きな節目を迎え、連盟の更なる発展をお祈りいたします。

●四〇周年によせて

めざそう生涯剣道

中四国学生剣道連盟顧問

中西 康



中四国学生剣道連盟が結成されて四〇周年を迎え、益々隆盛した学生諸君がそれぞれの目標をめざして、剣の道を通して精進しておられることは、まことに頼もしくご同慶のいたりでございます。

今日の中四国連盟の充実は歴代の会長さんや役員、そして親身になって審判の労をとっていただいた諸先輩のご尽力と、学生諸君が自主的に運営の企画等協力して実行に当たられたことが相俟つての結実であると言えます。

特に前会長であられた故大森玄伯先生の、中四国連盟の健全育成にかけられたご熱意には、今思ひ出しても本当に頭の下る思いがいたします。私も大森先生の驥尾に付して審判等で行動を共にさせていただきましたが、いつも植田一先生と名コンビで学生諸君を暖か

く見守っておられた姿勢が印象的でした。

大森先生の剣道観は、「武道は長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に昇華した伝統文化である。その剣道が試合に勝つための竹刀術となつては、遺産継承者として淋しく嘆かわしいことである。速く当てる、より多く当てる稽古でなく、攻めた攻められた、くずした破られたの剣道の理法に適った稽古を平素心がけたいものである。そのためには常に原点に還つて、とかくおろそかになりやすい基本、打ち込み、切り返して、生涯剣道につながる基盤をしっかり

と築くことが大切である」と基本の重要性を強調しておられました。現代の剣道は、全般的な傾向として試合偏重であるという声が聞かれます。そして全日本剣道選手権大会の試合の内容についても、いろいろ物議をかもしたことがありましたが、試合は真剣勝負の立前から負けてよいということはありません。なんとしても勝たなければ評価されませんが、問題は内容であります。理合に適っており、自他ともに納得がゆき、観戦者に感動を与えるような内容でありたいものです。

気攻めから出る心気力一致、懸待一致の打突、これは大変難しいことですが、この心技一如の妙技を錬り上げてゆくところに剣道の真髄があると思います。生涯剣道の修行には、いうまでもなく修行の段階があります。その各段階において正師について正しい剣道を学ぶことが肝要であります。

私どもは単なる技術の追求や勝敗の結果のみにこだわることなく、あくまで剣道の理念に基づいて先達が厳しい研鑽を積み重ねて遺された、日本伝統文化である剣道を、二一世紀に正しく伝承してゆかなければならない重い責務を負っていることを忘れてはならないと思います。

終わりにりましたが、今後一層中四国学生剣道連盟が発展することを祈念いたし、四〇周年のお祝いのご挨拶いたします。

●四〇周年によせて

不惑になった

中四国学生剣道連盟

中四国学生剣道連盟顧問

永田卓三



中四国学生剣道連盟が発足して、今年で四〇周年を迎えられるとのこと、まことにおめでとうございます。

私が最初に評議員会及び審判会議に松山に出席いたしましたのは、多分昭和五八年の春であったように記憶しています。愛媛大学が会場で開催されました。その頃は審判員全員剣道具を持参し、会議終了後は審判研究会、その後は合同稽古会で汗を流すのが恒例であり、

植田一先生をはじめ、大森先生及び諸先生のご指導を受けたことが昨日のような気がします。このような稽古会は他の大会では見られない素晴らしい研修が計画されていたのには驚きました。

また大会の運営は、実に整然と、しかも、微細にわたって立案実施されていたことにも、目を見張るものがありました。私は自分が勤務していました高校の剣道部員に、この大会を運営される学生役員の活動ぶりを話して聞かせていました。これらのことから考えますと、将来人の上に立つ者としては当然のことだという人がおられるでしょうが、頭では考えても、実行に移すことはなかなか容易ではありません。

また、参加大学の数も最初は男子中心でありましたが、その後女子学生の参加も年を追うごとに多くなりましたことは、まことに喜ばしいことで、将来国づくりの礎をなす幼児教育、家庭教育の原動力となられる女子選手の皆さんが、多数出場されることは、まことに頼もしい限りであります。全日本学生剣道連盟が、全国家庭婦人剣道大会、全国女子剣道選手権大会を毎年開催されますその目的も、幼少年の健全育成が重要な目標となっております。

四〇年と一口に言いますが、その間に会の運営に当たられた学生役員のご心労は、まことに多かつたことをお察しいたします。「楓葉は年を経て紅なり」と言われますが、楓は秋になると紅く色づくのは、霜に当たるからであります。

苦しい試練はいわば人生の「霜」であります。苦しさに耐え抜いてこそ輝かしい将来が開けるのです。

また、この四〇年の流れを人生に例えますと、中国の聖賢が申された「不惑」の年を迎えたこととなります。剣道修練の教えの中にも、「四戒」の一つにあります。「惑う」ことなく、中国四国学生剣道連盟の発展のために、若い情熱を燃やしていただくことを大いに期待し、今後この連盟が一層発展いたしますことを念願として止みません。

●四〇周年によせて

四〇年前の大会から

中四国学生剣道連盟顧問

福田明正

私は第一回の中四国学生剣道連盟から関係させていただいたので、そのあらましを述べたいと思います。

中四国の学生剣道選手権大会は、三二年広島大学で、岡山大、香川大、呉保安大、高知大、修道大、徳島大、島根大、鳥取大、松商大、広大の一〇大学一五チームの団体試合と、九六名の個人試合を、広大剣道部創設一周年記念大会として開催したのが最初です。四三年までは同じ内容の大会を、広島、松山、岡山、島根、鳥取、山口、香川の参加大学持ち回り方式で主管しました。その後、参加大学の激増に加え、全日本学生剣道大会が三四年から選手権大会を春季に、優勝大会を秋季に大阪から東京で開催するようになり、その予選を兼ねる中四国の学生大会も四四年からは、選手権大会を春季に松山で、優勝大会を秋季に広島で開催することになりました。発足当初はチーム編成が困難なため選手権のみに参加した大学も漸次チーム



を編成し、平成四年頃には優勝大会に二六大学、選手権大会に二五六名とほとんどの大学が参加するようになりました。

中四国女子学生剣道大会は、すでに四二年に発足した全日本女子学生選手権大会の予選を兼ねて四四年に発足しました。優勝大会は四九年に発足しましたが、共に男子の春季か秋季の大会に併催されました。

しかし、五七年に全日本女子学生剣道優勝大会が秋季に名古屋で開催されるようになってからは中四国女子の優勝大会は秋季に、選手権大会は春季になったので男女共五七年から、春季に選手権大会を松山で、秋季に優勝大会を広島で共催することになりました。

第一回女子学生の選手権大会にはわずか三大学四名の寥寥たる大会でありましたが、現在は三一大学一八〇名となり、優勝大会も二三大学参加の盛大なものとなりました。戦前には見られなかった女剣士の活躍は、中四国に限らず全学剣連の中核として今後画期的隆昌をもたらすものと信じます。

その後五六年より男子団体・女子個人の新人大会が、岡山で開催されるようになり、裾野は広がって行くようになりました。

島大では、第四回と第一三回大会を主管しましたが、当時は部員一〇名足らずで全員が選手であるため、大会の運営はもちろん、経費の捻出等に駆け回った苦しさがいまだに思い出されます。又四八年の第五回中四国女子の選手権大会に二名と、五二年の第四回女子の優勝大会に三名の全員が初出場した事と、五四年男子団体の初優勝並びに五八年男子個人試合での初優勝は、忘れられない感激であります。なお三五年頃から島大との定期交換試合を持ったのは成績不振の対策の外に、両大学親善のためのものでありました。

現在男子二六大学、女子二二大学という盛大な大会になった陰には大会を支えて来られた方々の並々ならぬご尽力と、剣道を愛する学生諸君の熱意によるものと深い感動を覚えます。

一層の発展を祈念いたしております。

●四〇周年によせて

新しい目標に向かって

中四国学生剣道連盟顧問

堀江幸夫



中四国学生剣道連盟創立四〇周年を迎え、心よりお慶び申し上げます。

私が中四国剣道連盟にOBとしてはじめて参加させていただいたのは、記憶が薄れるほど古くなりました。その間、数多くの学生諸君と肌の付き合いをしながら、いつも清新の息吹を与えてもらってきました。お陰様で年甲斐もなく、自らの多情多感の青春時代を偲びつつ、審判に合同稽古に汗を流すことができました。

また、植田一先輩、故大森玄伯先輩にお稽古いただくのが大きな喜びでありましたし、新進のOBの諸君の若々しい剣風におおいに刺激をいただいたのも忘れ得ぬ一期一会の貴重な思い出です。これ

もひとえに連盟創立以来、運営にご尽力いただいたOBの方々と学生諸君のご努力の賜物と深く感謝し敬意を表します。

最近、剣道は単なる勝負事と考えられる傾向が、だんだん強くなっていくようで心配しています。剣道はその修練を通じて生涯をかけて人間形成を目指す道であります。人間形成に沿っていない剣道というのはだめだと思いますし、勝負だけでは技だけの妙味のない剣道になってしまいます。

剣道は日本の伝統ある精神文化です。例えば、言葉は背景となる文明文化の中で機能するものでありますから、その文化をぬきに言葉だけを勉強するのでは、その言葉さえ正しく理解できません。日本語を教える場合も、日本学の一環として日本語を教えるべきであって、文化的背景を抜きにして学ぶことも教えることも正しくないように、剣道も又、日本古来の伝統を学ぶことによって深められるのではないのでしょうか。

どうか、創立四〇周年を機に皆様方が新しい目標に向かって学生剣道の益々の普及発展のために、ご尽力されることを期待しております。

終わりにりましたが、中四国学生剣道連盟の一層の発展を祈念申し上げます。

●四〇周年によせて

稽古の指針

中四国学生剣道連盟顧問

山根幸恵



中四国学生剣道連盟創立四〇周年を迎えることができたのは、ひとえに学生諸君のたゆまざる努力の結晶によるものであり、これを支えた先輩・先生がたのご協力、ご支援によるものであることを想い、ともにご同慶の意を捧げたいと思います。

剣道は防具をつけて稽古するところに喜びがあり、竹刀で撃ち合うことによって、剣道への連帯感が生れてくるものです。理論を抜きにして、「剣道をやってよかった」との快感は、稽古後の一息ついたときに実感するものです。

鳥取には『雖井蛙流平法』という剣術が伝承されています。この伝書の中には、現在も参考となる歌が沢山ありますが、その中より気のついたものを摘出してみます。

構え

いろいろと構はあれど 正眼の外にころをうつすべからず 身の構へ 心の構へ 気の構へ 人にそなふる そなへはずすな

足さばき

踏む足は 我が立ち歩む そのままに 右足前に 爪先きで立て 心せよ

ややともすれば 身構は ふむべき足の かたよりぞする

手の内

手の内の できたる人の 取る太刀は 心になふは たらきをなす うつ時は

両の拇指 くすり指 小指の三つで しばる心地で 手元にて 茶巾搾りに しばり懸け

右手は卵を 握るとや知れ

打込み

打込みは ふりにかまはず 数を打て いつかは馴れて 早わざとなる

打込みは 間合離れて 飛び込みて わが鰐で 斬る

心せよ

修業の段階

初めには すなほに大きく 業をもて 中はいろいろ 後は無駄なく

思念工夫の要

稽古をば 疑ふ程に 工夫せよ 解きたるあとが 悟りなりけり

稽古を積むこと

入代り 立代りても 打てや打て 竹刀の竹は ささるなすとも

稽古

此の道は 上手ばかりが 順ではなし 下手ありて又 上手ともなる

師となれば 弟子を活かすを 旨とせよ われが強さを 示すべからず

「稽古は楽しい」ものであり、古い伝書の中には数多くの指針が包まれてます。一人でも多くの人が、この楽しみを分かちあって、精進をつづけて行きたいものです。